

● 11月選評

小島なお

客席を埋め雑食の大白歯

：

奎いう子

演者にも観客にもある大白歯。そしてステージを取り囲む座席はどこか歯並びのようにも見える。雑食の人間たちの欲望の声を吞む大口を開けたホール。

寒くなるほど

うれしい腕を遠くまで

いずれは山葡萄の垂れるまで

：

塩本抄

季節が深まるほど伸ばされる腕。それは木々を黄葉させたり、山に冠雪を被せたりするのだろうか。うれしい時の腕の抱擁に山葡萄も実を嫋やかにゆだねて。

立冬の弱い散文止まらない

：

平 人工

冬の訪れが言葉を統制する心の籐を緩めるのかもしれない。寒い、心細い、寂しい。目的を有さない言葉が漏れる季節は胸が弱い散文で一杯になる。

言い草や仕草を摘んで

粥にした

：

仮野

言い草や仕草を慈しみながらあなたという野から摘んでゆく。あなたらしさを炊いたそれは七草粥のように私の心の健康を護り、良き方へ導いてくれる。

君はぼくがはじめてだから
いのちが

キウイの皮を放っておけば
できること。

…
及川 華凜

文章を継ぎ接ぎにしたような、誰かの声に声が重なるような。繋がりそうに見えるながら繋がらない文脈のもどかしさの奥に隠されている大事な何かの気配。

はつふゆの後天的なペアシューズ

…
蛙多楓太

あなたとは双子のような先天的な結びつきではないゆえに目に見える形の印が必要だった。季節の巡りのようにペアシューズが私にあなたを気づかせる。

振れば手は枝になり損なう万緑

…
奥村 俊哉

手を振ればたちまちに意味を獲得してしまう。またね、さようなら。万緑の漲る枝々はみな沈黙を厳しく守りながら別れをただに見送るばかり。

セーターの下に水蒸気を貯める

シャーベットにはブレーキがない

…
中村祐希

通気性のないぶ厚いセーターを着て、室内にいる光景を浮かべる。あたたかい部屋で掬い続ける冷たいシャーベット。水分を出し入れする忙しない冬の身体。

的を見て

季節が分かる

今は冬

：

赤石 涼

弓の的を想像した。引き絞りながら的と自分のあいだに横たわる虚空を見定める目には、空気の冴えや光る塵によって季節がたしかに捉えられている。

うろこ雲揺れる万国博覧会

膝のすり傷まで愛おしい

：

都子

大阪万博には158の国と地域が参加したという。期間限定だとしても国境を越えて万国が集うリングにはかりそめの約束のような愛を信じてみたくなる。